

G・W・ロビンソン氏英訳・王維詩集 (POEMS OF WANG WEI) 随想

夜 久 正 雄

(一) G・W・ロビンソン氏の訳業

G・W・ロビンソン氏の王維詩集の英訳をやっと入手した。ペンギン・クラシックスの中の一冊であつて POEMS OF WANG WEI といふ本である。一九七三年刊となつてゐるから、手にするのに随分時間がかかつたものだ。洋書を扱ふ書店に頼んであつたのだが、なかなか手に入らなかつたのである。

G・W・ロビンソン氏はイギリスの東洋学者で、拙著『古事記のいのち』を英訳してくださつた方である。

(THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN - 1969)

その経緯は同書及び『古事記のいのち』改訂版(昭和四十九年)の序文に書いた通りである。それ以来おつきあひしてゐるが、その前にすでに『旧事紀』の研究者として知られてゐたので、日本研究家としても著名な方である。

今度は漢詩の英訳である。ペンギン・ブックス一四四ページの瀟洒な英訳詩集である。

『古事記のいのち』英訳の時、特に短歌の英訳について大分議論した思ひ出があるので、その時のことを

記して氏の訳業の苦心をしのぶすがにしたい。

青雲の白肩の津は見ざれども今宵の月に思ほゆるかも

といふ田安宗武の短歌がある。この短歌の英訳のことが一例になる。この歌は、言ふまでもなく、『古事記』の神武天皇の記事の中に出てくる「青雲の白肩の津に泊つ」といふ箇所を、宗武が想像して詠んだ歌で、『古事記』を詠んだ名歌の一つである。

この「青雲の白肩の津」の英訳が問題になった。「青雲の」は言ふまでもなく枕言葉である。それをロビンソン氏が知らないはずはない。それなのに氏はあへて

The Harbour of White Shoulder of the blue clouds

と訳されたのである。

「白肩」は地名であるから Shirakata だいいといふ私の意見に対して、それでは何のイメージも浮ばない、地名にしてもその言葉の持つてゐるイメージといふも

のがある、といふのがロビンソン氏の意見で、それには私は納得した。しかし、「青雲の」といふ枕言葉を of the blue clouds とは、何ともわからない、変な英文ではないかといふのに対する氏の意見は、できるだけ忠実に原文に即して訳すべきだとのことであった。つまりチェンバレン (Basil Hall Chamberlain) の流儀なのである。イギリス流と言ってよいかどうかは私にはわからない。これで大分やりとりがあつて、結局 of を under とすることゝ落着をみて、次のやうな英訳になったのである。「白肩」も最終的にシラカタとなった。

The harbour of Shirakata

Under the blue clouds

I have never seen but

By tonight's moon

I will think about it.

最後の行がまだ私にはよく納得できないが、いい訳詩

だと思ふ。

それで気がついたが、ロビンソン氏は枕言葉を実にうまく訳してをられる。枕言葉の中には意味のよくわからないものもあるが、その点をも十分考慮して訳されたのである。

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に  
立ちて 問ひし君はも (『古事記』倭建命)

この「さねさし 相模の小野に」を、

On the plain of Sagami

Standing high

同じヤマトタケルノミコトのみ歌、

八雲立つ 出雲建が はける太刀 つづらさは

まさ な身なしにあはれ

の「八雲立つ出雲建」を

The brave of Izumo

Where the clouds gather

また、

椅立の 倉椅山は さがしけど 妹とのぼれば  
さがしくもあらず (『古事記』速總別命)  
の「椅立の倉椅山」を、

Like a ladder

Mount Kurahashi

等々と訳してゐる。ちよつとみると何のこともないやうであるが、前記の of を under に代へただけで、訳の適否が分れるやうに、それぞれ結構苦心されたものにちがひない。

右のロビンソン氏の訳を B・H・チェンバレンの『英訳古事記』(KOJIKI, or Records of Ancient Matters)(一八八三年)および D・L・フィリップス氏の訳(KOJIKI, Translated with an Introduction and Notes by DONALD L. PHILIPPI, 1968)とくらべてみると、ロビンソン氏の苦心のあとがうかがはれるのである。

「青雲の白肩の津」について、チェンバレンはただ the haven of Shirakata として、枕言葉を省略した。

フィリップイ氏は the cove of SIRA-KATA of the bluish clouds と訳してゐる。

「ちねやし相模の小野に」は、チェンバレンは、  
on the little moor of Sagami, where the true  
peak pierces

とした。つまり「ちねやし」を「真嶺刺」として訳したのであらう。「チェンバレンの流儀」と私が前に述べたのは、かういふのを言つたのである。フィリップイ氏は次の通り。

On the mountain-surrounded

Plain of Sagami

「八雲立つ出雲たける」

the Idzumo brave (Chamberlain)

The many-clouds-rising/IDUMO-TAKERU  
(Philippi)

「椅立の倉椅山」

ladder-like Mount Kurahashi (Chamberlain)

The slopes of ladder-steep/Mount KURAPASI  
(Philippi)

右は、ほんの一例にすぎないが、これを見ただけでも、ロビンソン氏が、日本の歌の英訳に非常な努力をされたことがわかる。短歌の英訳といふ至難のわざにおいてロビンソン氏が高い評価を得てゐるのは、かういふ微妙な言ひまはしに払はれた努力の積み重ねによるものであらう。

## (二) ロビンソン氏の古事記歌謡の英訳

『古事記のいのち』は、言はば、一種の『古事記』解説書であるから、主なる文は現代日本語であるが、なかに沢山の古事記原文ならびに歌謡が引用してある。この翻譯に、非常な苦労がはらはれることになったのである。ロビンソン氏は、原稿を作る時、歌謡の箇所だけ空白に残して翻譯をすすめて、歌謡だけあとで別に訳したのである。つまり、英文の詩として通るやうに

翻訳しようと努力されたものにちがひない。これについてでもないいちいち述べてゐる余裕がないが、一例だけあげてチェンバレン訳、フィリップス訳と並べてみたい。

さる川よ 雲立ちわたり 歟火山 木の葉をや

ぎぬ 風吹かむとす

うねび山 昼は雲とる 夕されば 風吹かむと

ぞ 木の葉をやげる

といふ神武天皇のお妃のイスケヨリヒメの名歌二首の英訳である。

# Chamberlain

From the River Sawi the clouds have risen  
across, and the leaves of the trees have rustled  
on Mount Unebi: the wind is about to blow.

Ah! What rest on Mount Unebi as clouds in the  
day-time, will surely blow as wind at night fall,

[ whence] the rustling of the leaves!

Philippi:

Clouds are rising

From the SAWI River:

On UNEBI Mountain

\* The leaves of the trees are rustling;

The wind is about to blow.

On UNEBI Mountain

During the day the clouds shift restlessly;

Now it is night,

And as if to warn that the wind is about to

blow,

The leaves of the trees are rustling.

Robinson

From the Sai River

Clouds rise and come over

On Mount Unebi leaves of trees have rustled  
Wind is going to blow.

On Mount Unebi

By day there are clouds

When it is night

Wind will blow

Leaves of trees are rustling.

どれが一番いい翻譯なのか、判断はむづかしいが、ロビンソン氏が詩を訳さうとして苦労されたことはよくわかるのである。私はロビンソン氏によって記紀歌謡の全訳の出されることを願つてゐる。

かうした短歌の英訳に示された詩的な言語感覚で漢詩を訳出したのが、今度の王維の翻譯であらう。

(三) 王維詩集訳

短歌は一首一文を原則とするので、意味の上では単

純な内容とならざるを得ないが、感情の深さは57577といふ音数律の「しらべ」にあらはれる。それに比べると、漢詩の絶句形式は、云はば一詩四文で、相当複雑な内容を盛りうる上に、漢語の性格上、一語一音一字で、押韻法によつてゐる。しかも、孤立語・分析語であるから、ある意味では、膠着語の日本語の短歌よりも、英語に似たところがあつて、英訳し易いのではないかと思ふ。短歌の英訳で苦労したロビンソン氏にしてみれば、それほど難事ではなかつたのではないか。これは、ロビンソン氏の今度の訳業を甘く見てゐるのではない。短歌の英訳がむづかしいことからかう言つてゐることなのである。

この英訳王維詩集の「はしがき」の冒頭に、ロビンソン氏が「この数年来、私を訪ねてくれた友人たちはみな、この訳詩のいろいろな原稿を読まされ、そしてもしできれば、鑑賞させられたものである。シナ語（チャイニーズ）のできる人は仕事まで手伝はされた。」

(拙訳)と書いてをられるのを読むと、氏がどれほどの仕事に打込んでをられたかがわかる。王維の詩は約四百篇以上が残ってゐるといふが、その四分の一、約百篇の詩を訳したのがこの英訳詩集である。

日本人はたいてい漢語を日本語読みにして、主としてその意味を味はってゐるから、漢詩の日本語といふことにはあまり注意しない。これは日本の定型詩である和歌や俳句が音数律で出来てゐるので、外国の詩の韻律を味はふことがむづかしい。そこで欧米の詩を訳すとすると非常に苦労するのである。この苦労は、逆に和歌・俳句の欧米語訳の苦労と同じものかと思ふが、漢語(シナ語)の欧米語訳も訳詩であることに変わりはない。だから、百篇の訳詩は大変なことだったろうといふことは、訳詩の苦労をしたものにはよくわかるのである。

もっとも、シナ語について教養の乏しい私がいろいろ批評めいたことを言ふ資格はないと思ふので、この

辺でこの議論はやめて、王維英訳詩の二、三をあげ、原漢詩と対照し、併せて前野直彬氏編訳の日本語訳を載せて、紹介に代へる。(『唐代詩集』下、前野直彬編訳より)

### Meng Wall Hollow

New home near this Meng Wall  
Old trees — some dying willows still —  
And who will live here in the future  
To grieve vainly for him that was here before?

### 孟 城 坳

新家孟城口。古木餘衰柳。

來者復為誰。空悲昔人有。

孟城のあたりに家を新築した

衰弱した柳の古木が残っているだけのところだ

将来またここに住む人は誰なのだろう

私もかつてここに住んだ人を悲しく思いおこしている。

But the bright moon comes and shines on me

there.

竹里館

独坐幽篁裏。彈琴復長嘯。

深林人不知。明月來相照。

竹やぶの奥にただ一人

琴をひき また声長くうたう

誰も知らぬ林の中だが

明月だけは私を照らしにおとずれてくれる

次に阿倍仲麻呂の日本に帰るのを送った王維の詩の

原詩と英訳とをあげておかう。

送祕書晁監（阿倍仲麻呂）還日本

積水不可極。安知滄海東。

九州何處遠。万里若乘空。

向國惟看日。歸帆但信風。

鰲身映天黑。魚眼射波紅。

鄉國扶桑外。主人孤島中。

Dear Park

Hills empty, no one to be seen

We only hear voices echoed ——

With light coming back into the deep wood

The top of the green moss is lit again.

鹿柴

空山不見人。但聞人語響。

返景入深山。復照青苔上。

しんかんとした山に人がげ見えず

人声だけが聞えてくる

落日の光は深林の奥までさし入って

青い苔の上の一点を明るく照らし出す

Bamboo Grove House

I sit alone in the dark bamboos

Play my lute and sing and sing

Deep in the woods where no one knows I am



別離方異域。音信若為通。

For Censor Chao returning home

to Japan

Massed the waters, limitless

How to know what is east of the Immortals'

Ocean

In all the world what place is so far?

Ten thousand miles like riding the void

Heading to your country, you can only look

to the sun

Your returning sail can merely trust to the

wind

The great Turtle's body turning the sky black

The fishes' eyes piercing the waves with red

Your country's trees are beyond Fusang

country

My friend, you will be in your lonely islands

Separated, we will be in different realms

How are tidings to pass between us?

(四) バーバラ・ロビンソン夫人のこと

ちひ、この POEMS OF WANG WEI の最初の中  
扉に、

To Barbara

とだけ書かれたページがある。「バーバラ」といふのは、ロビンソン氏の夫人のお名前である。といふところまでは、未知の読者でも想像がつくと思ふ。しかしこのバーバラさんが画家で、しかも日本の舞樂の絵をはじめ東洋の風物を沢山描いてゐるめづらしい女流画家であることを知る人は少いだらう。

フルター・ロビンソン氏が、『古事記のいち』英訳の仕上げのために来日された時、たまたま宮内庁楽部の舞樂演奏が一般公開されたので、御一緒に観覧した。私は、舞樂ならびに雅樂は日本の代表的古典樂で、東

洋芸術の粹であると信じてゐたので、日本ならびに中国の古代史を専攻されるロビンソン氏に是非これを鑑賞してもらひたいと考へた。しかし当日、ロビンソン氏は、雅楽の音色がサツド sound であると言つて、聞くのもつらさうで、喫煙室に入つてしまつた。ところが、バーバラ夫人は、舞樂の美しさに熱中してしまつて、さかんにデッサンを描いてをられた。円をいくつもいくつも描いていつてだんだん形をあらはすといつた描き方で、さかんに鉛筆を走らせて、舞樂の動きをあらはさうと夢中になつてをられた。その中の一枚を所望して祕藏してゐるが、実にすばらしいデッサンだと思つた。

さて、それから、三年たつて、突然、バーバラ夫人のロンドンでの個展の案内書をいただいたのである。それは主として日本滞在中の題材による油絵であつたが、その相当部分を占めてゐるのが舞樂の絵なのである。 Japanese Imperial Court Dancer と書いてあ

つた。しかし、その案内書には舞樂の絵の写真が載つてゐなかつたので、お願ひして、御自宅所蔵の油絵の写真を何枚か送つていただいた。原作ではないから、感じが十分にはわからないが、舞樂の樂人たちの一斉に動作する時の、調和にみちた動きといふやうなものの一瞬がとらへられてゐる、といった感じの絵で、昔から日本に伝へられてゐる——舞樂の絵は日本には古くから沢山あるが——絵画的な、完成された形を示す視覚的な絵とは、何かちがふものがある。線そのものの輪郭そのものが動いてゐる、走つてゐる、といった感じの絵であつた。

舞樂を題材にしてあれだけの絵を描いた欧米画家はじめてではないかと思ふ。日本人の画家でも油絵で舞樂を描いた人を私は知らない。

これをロンドンで展覽されたのである。その後、舞樂の歐洲公演が行はれて多大の感銘を与へたといふので、欧米人の中には、舞樂から東洋舞踊音楽・日本舞

踊音楽の粋を感じた人も多いと思う。バーバラさんはその先駆者とも言へるだらう。

御主人ロビンソン氏の日本古典の翻譯、王維の翻譯とならんでバーバラ夫人の舞樂の油絵（歌舞伎の絵もある）を見ると、このお二人の日本文化の理解と紹介の業績は、相当のものがあると思ふ。イギリス人のアジア研究は、早くからはじまつてゐて、偉大な業績をあげてゐるが、その伝統をつぐこのご夫妻の業績に私は心から敬意を表したい。お二人とも極めて謙遜な人で、宣伝めいたことは全くしない。英訳『王維詩集』の訳者としてのロビンソン氏の略歴の中にも、研究業績ならびに他の訳書のことについては一言もふれられてゐないので、敢へて拙い一文を書いた次第である。（本稿は歴史的かなづかひによる。ちなみに、「かなづかい」について、ロビンソン氏は歴史的かなづかひを支持してをられる。）